上田佳奈／咲くやこの花インタビューvol.49

上田佳奈(うえだ･かな)【令和7年度　美術部門[現代美術]】

回り道をして掴んだ版画という表現「何かを始めるのに、遅すぎることはない」

関西を拠点に国内外で活動する上田佳奈さんは、2025 年に「第 4 回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ」で大賞を受賞するなど、今後の活躍がますます期待される作家です。ロンドン芸術大学でファッションデザインを学んだ後、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校で版画を学び、以来、版画を中心に、写真や映像も手がけながら、各地で精力的に作品を発表しています。

「咲くやこの花賞」の受賞作では、パブリックドメインの 13 人のポートレート写真をドット状に切り抜き、アクリル板の両面に刷り重ねることで肖像を表現しました。光の粒子が像を結ぶように、ドットのつながりによって一つの像が浮かび上がる作品世界は、混迷する現代において、世界を「見る」とはどういうことか、私たちが「見ている」と思っているものの本当の姿は何かを問いかけ、版画の新たな可能性を切り拓くものとして高く評価されています。

取材･文／岩本和子

「PATinKyoto」でも大賞に、実りの多い 2025 年

咲くやこの花賞、受賞おめでとうございます。

ありがとうございます。

まずは、受賞のお知らせをお聞きになってのご感想を教えてください。

今まで錚々たる方々が受賞をされていて、まさか自分がと、ただただびっくりだったのですが、ここまで来るまでに本当にたくさんの方に支えていただいて、導いてもらったという感覚がありました。あの時、あの場所で、あの方に出会っていなければ今の自分　はなかったなと思う場面がたくさんあって、これまで活動をしてこられたことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

2025 年は、「第 4 回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ」でも作品「particle_0006」が見事、大賞を受賞されました。2025 年はどんな 1 年でしたか？

本当に目まぐるしい 1 年で、展示の数も過去で一番多くて、通算すると 12 個ほどあり、特に春は 3 個ぐらい重なって、なかなか大変でした。でもそのおかげで、いろんな方に作品を見ていただく機会が増えて、展示をしていても、「あの展示を見たことがあるよ」とか、ご感想をいただくことも増えました。展示をすることで、また次の展示にもつながって、さらに賞をいただくという思ってもいない展開があって。版画をやっている方は、大学からやっておられて、そのまま作家活動を続けている方が多いんですけど、私は回り道をして版画にたどり着いたので、王道のルートではない自分を選んでいただけたこともすごく嬉しかったです。何かを始めるのに遅すぎることはないので、これからチャレンジしたいと思っている方にとっての希望になったら嬉しいなと思っております。

この先、2025 年を振り返ったときに、あの 1 年があったからと思えそうですね。

そうですね。本当に思いがけないことがたくさん起きました。

「PATinKyoto」に推薦をしてくださったギャラリーノマル代表の林聡さんがちょうど推薦文を書いてくださった直後の 2024 年に亡くなられ、展示を見ていただくことはかないませんでした。生前にお約束していた個展を 2025 年の夏に開催させていただいたのですが、林さんにもそのニュースをお届けしたかったです。でも、林さんが空から応援してくださって、いろんな賞をいただくことにつながったんじゃないのかなと不思議な力を感じています。

ファッションから版画へ…その道のりとは

版画にたどり着くまで回り道だったとおっしゃいましたが、まずはロンドン芸術大学に進学されるまでの道のりを教えてください。

子どもの頃からファッションに興味があって、そのきっかけは、同級生のお姉さんでした。すごくおしゃれな方で、同級生と帰り道が一緒だったので、お姉さんとも自然と仲良くなって、一緒にお買い物に行って、新しく買った服を着てファッションショーをして親に見せたりするような、服が大好きな幼少期でした。10歳ぐらいでファッションデザイナーになりたいと思って、見よう見まねでスケッチもやっていました。高校生になって国内の進学先を見学に行っていたのですが、割とかっちりとした感じで、そこで学んでいるイメージが湧かず、海外でも勉強できるところがあると知り、当時、憧れていたデザイナーの多くの方がロンドン芸術大学を出られていたので、高校生の夏休みに一回、見学に行きました。

そうなんですね。

その時は短期のコースを受けていました。ドローイングのコースだったのですが、上手く

描くことや何を描くかを考えるのではなく、目をつぶって描いてみたり、道具づくりから考えてみたりと、ドローイングをどうアプローチするかを試すような実験的な内容でした。そこで、大学での授業も同様に自由度が高いことを知りました。ファッションを学ぼうと思うと、スカートを作りましょうとか、パンツを作りましょうとか、アイテムごとに習得をしていくようなカリキュラムが多いと思いますが、ロンドン芸術大学ではみんなで同じものをつくるような課題はなく、1 枚のドローイングだけが渡されて、それをインスピレーションに自分なりに解釈して作ってくるといった課題の設定自体がクリエイティブであることを知ってワクワクして留学を決意しました。でも、行ってみるとちょっと思っていたのと違っていました。

何が違っていたのでしょうか？

自分自身が服そのものは本当は好きではなかったんだと気づいてしまいました。ずっとやりたいと思っていたのに、「あれ？違う」って。同級生が「このブランドのこの袖の付け方がかっこいいよね」とか、「この襟のディテールがすごい素敵だよね」とか話しているんですけど、私はどっちかというと、「なんで人は服を着るんだろう」とか、「意味のある服って何なんだろう」とか、服の本質について知りたかったと気づいてしまいました。商業的に服を作ることとはまた違うところに興味があることに気づいて、そのことに結構ショックも受けたのですが、途中で辞めるという選択は自分でも悔しくて、何とか卒業しました。

ロンドンには何年、行かれていたんですか？

大学入学前には 1 年間、ファウンデーションコースに通い、そこでアートとデザインを総合的に学び、その後ポートフォリオを作って大学の学部に行くという形なので、合計で 5 年間でした。4 年間の学部の間に、1 年はいろんなファッションスタジオに行ってインターンをさせてもらう年もありました。

そして、帰国されて大阪芸術大学附属大阪美術専門学校で版画を履修されました。そのいきさつを教えてください。

大学を卒業して専門学校に行くまではブランクがありまして、違うなと思いながらもファッションしか学んできていないので、服のお仕事をしながら少しずつ制作をしていました。その制作も、服に落とし込んでいく表現しか知らないので、服のパフォーマンスをしたり、服が主役の映像作品を作ったりしました。でもそれにも限界を感じて、自分は何に一番興味があるんだろうと改めて考えるようになりました。そのときに思い出したのが、学生の頃からよく自分に問いかけていた、自分にとって意味のある服とは何だろう？という問いでした。自分にとって意味があるものは、最新のおしゃれなファッションではなくて、もっと自分の身近でパーソナルなものだと感じていたことを改めて思い出しました。

それはたとえば、どんなものですか？

たとえば、祖母の形見としてもらったコートをはじめ、そういった思い入れのあるものが一番意味があると感じました。それをひも解くと、かつて祖母の体を包んでいたものが今も残っていることで、祖母はもうこの世界にはいないけど、祖母がいた時の記憶が蘇って、祖母と自分の時間がそこで出会えるというか。そういうところが、服ひいては物の魅力だなと思いました。今はもう存在しないけども、その痕跡が残っているということがすごく力強いと感じ、自分が本当に興味あるのは「痕跡」なんじゃないかなと思いました。それで、痕跡に一番近いメディアはなんだろうって考えたときに、版画なんじゃないかなって。版自体も何かの痕跡であるというのと、さらに版を使って印刷をしたときに、またそれが版の痕跡になっているという二重の痕跡でもあるなと思って。

それまで版画への興味は？

全然、ありませんでした。でも一つのメディアと考えた時にすごく興味がわいて。たまたま新聞に銅版画の教室の募集があって、これしかないと思ってすぐ申し込みました。それで伊丹の工芸センターの銅版画教室に通うようになりました。講師が大阪芸術大学の山本善一郎先生で、当時は仕事をしながら銅版画教室に通っていたのですが、「そんなに版に

興味があるのであれば、学校に行くのはどうですか」と山本先生がお勧めしてくださって。山本先生の同級生である日下部一司先生が専門学校で教えていらっしゃって。「すごく面白い先生だから、一度会いに行ってみてください」とご紹介してくださって、会いに行ったのですが、本当にすごく素敵な先生でした。版画は専門性が高いので、版画の種類によって先生が違って、教室もバラバラなことが多いのですが、専門学校では先生も学生も少人数制で、1 つの教室で　全種類の版画もできることがわかり、ぜひここで学びたいと思って入学を決めました。

その時、ロンドンの大学を卒業されて何年くらい経っていたんですか？

7 年くらいでした。30 歳手前で専門学校に入学したので、高校を卒業して現役で入られた方とは 10 歳ぐらい違う状況で、その年齢差も不安だったのですが、私が入学した時は社会人経験をされた方もいました。私は海外の大学を出ていたので横のつながりもなかったのですが、専門学校に行ったことで学生や先生方ともつながれて、それまで自分の中で宙ぶらりんな感じがあったのですが、そんな自分を受け入れていただいて、皆さんのおかげで地に足がついた感じがしました。

版画と出会ってコミュニケーションのズレも愛おしい

それから今の作風はどのように確立されたのでしょうか？

写真のように階調のある像をシルクスクリーンで印刷する場合、グレーのトーンは表現できないので、白か黒のどっちかに置き換えないといけません。そのため網点をかけて印刷する作業があるのですが、その網点の作業が興味深くて、これまでも網点の面白さを見せるような作品を作っていました。particleのシリーズにおいても、拡大してみればただの点の羅列でも、引いてみると人間の姿がイメージとしてちゃんと認識できるところの不思議さを表現したいと思って制作しました。人は一個一個の点をちゃんと認識しながら、そ

れらがパターンを持ち始めると像として読み取る能力を持っています。細部を認識しながらも、同時に全体とか関係性も読み取れることができる。その両方を同時に把握できるところが人間らしさと言えるんじゃないかなと。particleの作品では、ドット状の複数人から十数人の肖像が重なっていますが、見る人が脳内で点をつなぎ合わせて、余白を埋めることで、まるで一人の人物画として像を結ぶ。そういう見え方が生まれたらいいなと思って作りました。作品を鑑賞することで、見る人自身の脳内で起きる認知のプロセスを引き出すことこそが、「人類の肖像」になるのではないかと考えています。

見た人によってそのイメージは違うと思いますが、見る人がいて初めて上田さんの作品が完成する。

そうですね。脳内で統合されて初めて完成という感じなので、どんなものを脳内で思い浮かべたのか実際に確認はできませんが、いろんな見え方が存在していたら嬉しいです。

版画というものの捉え方からすでに上田さん独自の考えがあったからこそ、今の作風が出来上がったんですね。

教わった先生の影響もすごくありますが、版画というものが、いわゆる木版画、木を彫ってプリントしたものだけではなく、日常の中にたくさんあるものではないかと感じています。拡大解釈にはなりますが、オリジナルがあってその写しができるということは、例えば一つのレシピがレシピサイトにあげられていて、それを見ていろんな人が家の冷蔵庫にあるもので作る。そうするとレシピという一つの版はあるんだけど、「偶然、この食材があったから」というアレンジも加わることで、ズレとか歪みが現れます。そういうふうに捉えてみると、視覚的なものだけじゃなくても、言葉や遺伝子も版の一つではないかと。元の版はあるんだけれども、人を介することによってズレやノイズが生じることがすごく面白いと感じています。逆に言えば、版や型がないと、そのノイズは浮き彫りにならないというか。人とのコミュニケーションで誤解が生じると、もやもやしたり、悲しいと思ったりすると思いますが、版画と出会って、それらが愛おしいもののように感じられるようになりました。違うからこそズレが生じるのは当たり前だし、逆に自分がどう思っているのか、他人と何が違うのかということを感じさせてくれる貴重な機会なんだなというふうに思っています。コミュニケーションのズレはマイナスに捉えられがちですが、実はすごく自然なことだし、歓迎されてもよいのではないかと版画を通してそう思います。

「人にも版がある」という考え方もいいですね。その最たるものが先ほどおっしゃった遺伝子ですよね。

そうですね。遺伝子もまさに版だと思っています。いろいろな意味で人も一つの版だと捉えることができると思います。別の人と出会った時に、自分の情報を転写しようとしてエラーが起きることもあると思いますが、それをうまく擦り合わせながら生活しているところがすごくけなげで愛らしい。人間って頑張っているんだなと思います。

例えば作品を通して、自分自身や作品への思いを理解してほしいというお気持ちはありますか。

自分自身は面白い中身のある人間だと思っていなくて、ただ感じ取るためのセンサーというか、受容器みたいな感じでいられたらいいなと思います。外部から取り込んだものをまた外部に出した時に、何かしら反応があれば嬉しいですけど、それは私がコントロールすることではないと思っています。その人にとって意味のある反応であればそれで十分で、好きに見てもらえたら嬉しいなという感覚です。

「受容器」という考え方が、お洋服着るのが大好きだったということとすごく近いものがありますね。

確かにそうですね。表現としては別かもしれないですけど、実は繋がっているのかもしれません。

大阪市民の評価軸に咲くやこの花賞を贈りたい

では最後に、上田さんが大阪市に咲くやこの花賞を贈るなら、大阪市の何に贈りますか？

具体的ではないかもしれないですが、大阪の方の「面白いか、面白くないか」という評価軸に贈呈したいと思います。「おもろいか、おもろくないか」とシビアに見ているけれども、実はその時の場面や空気を読んで、みんなが求めていることを言おうとか、一歩先を行ってやろうと思っていて。それはサービス精神であり、相手のことを思ったコミュニケーションだなと思います。これはアートにおいても同じで、見た目だけじゃなくて中身があるか、見る人のことを考えて作っているかというところも私自身はすごい大事なポイントだと思っています。私自身、すごく変な経歴なのに受け入れてもらえたのは、大阪の土壌があったからだと思っていて、変な人でも、「面白いやん」って思ってもらえたら、懐広く受け入れてくれて、かわいがってもらえる。それって、人が成長したり、自分らしくいるためには、すごく素敵な土壌なんじゃないかなと思っていて、大阪の方には感謝しています。